

「舌切雀」の展開 (三)

東京高等學校教授 小池藤五郎

「舌切雀」の脚色された代表的の作品を記す事は、其の展開を知る上に必要であらう。「歌等功雀高名」(寶倉主作、黃表紙、寛政八年刊)は歌川豊國の挿繪であり、代表的の作品である。

抑々吉原雀の根本を尋ねるに、後漢の楊寶が花陰山クワイゼンで巢に食はれやうとする巢立ちの雀を助けて歸り、飼養してゐるに、百日餘で羽根が生えて飛び去つた事が始である。この雀の子孫が日本へ渡り、延喜の帝の頃の福羅雀フクラスズメは其の子孫である。福羅雀は吉田の片ほりに住む爺婆に飼はれ、可愛がられてゐるが、或時洗濯の糊を嘗めたので、遂に舌を切つて追出された。雀は、

「糊を嘗めて舌を切られるに、酒を買つて尻を切られたよりましであらうか。いつそ舌がひり／＼する。舌ひり雀じゃ」。

なごゝ洒落る。雀は舌を切られたので三度の食事も出來ず、親雀は心配して醫者につけ、鳥トリのまマちチの御符ミフを戴くやら、鳥トリごへの毘沙門様へハダシマキ跪詣ヒツギをするやら大騒である。

この様な事件が起つたにも知らず、爺は山から歸つて來、婆の物語を聞いて喫驚ビツア仰天し、雀を捜しに出た。雀は我家へ爺を迎へて非常に御馳走した。雀は舌を切られたので久しく外へも出なかつたが、今日はぶらりヒラリ海邊へ出て見るに、風が強いので、吹き飛ばされて蛤が口を開いた中へ落された。蛤は雀をくはへたまゝで沖の方へ動いて行つた。

子雀が久し振に遊に出たが歸らないので、両親は心配し、向三軒兩隣を頼んで、椎の木屋敷から向島の方を捜してもらふ。蛤は開いた口へ雀が落ちて來たので、くはへて龍宮へ行き、雀に何か藝が有るかき聞くミ、竹に雀の輕業をすこいふので大に喜び、輕業師の蠨蝶ウヂエに雀を賣つた。雀は龍宮の廣小路の兩國ニクニいふ處で輕業をはじめた。今まで豚の輕業蝙蝠の輕業などは聞いたが、雀の輕業はまだ無かつたので、大評判になつた。其の後雀は商賣を始め、鮎アサギの雀焼アサギノクヤキいふものをこしらへて賣つた。龍宮では、今まで金鑄キンツバヤキ燒カリガネヤキ雁カニ金燒カネヤキはあつたが、鮎の雀焼は始めてだきて大評判になつた。併し焼くそばから雀は自分で食つてしまふので遂にこの商賣には失敗した。

失敗した福羅雀は貧乏雀になつたので、奉公しようとし、口入屋の手で表具屋へ住込んだ。其處で得意の雀ムスノガタ形カタを張つて少し工面が良くなつたが、挿鉢の糊を又みんな嘗めたのでしくじり、遂に表具屋を逃げ出した。

雀は蛤の口へでも飛込んだら故郷へ歸れさうなものと思ひ、幸にも口を開いてゐる蛤が有つたので飛込んだところ、何處へか連れて行かれた。そのうちに蛤が口を開いたので、飛出して見るミ、蛤は既に汐干狩の人に拾はれてゐる、福羅雀は戀しい故郷の洲崎の濱邊へ出る事が出來た。

福羅雀は喜んで飛んで行くミ友達の雀に出會ひ、まだ碌に話もしないうちに鳥刺に刺されて安針町へ賣られた。鳥籠の中で末は鷹の飼食にされるものミ覺悟してゐるミ、宇佐八幡の御告によつて、諸國に放生會が始つたので、放鳥を賣る親仁に買取られ、淺草觀音の地内で放された。そこへ觀世音が現れ出て、「今日まで汝を守つたのは我ミ楊賣の靈である。今後は淺草の手品師芥子ウヂシノスケ之介の手品の種に使はれよ」ミお告げになつた。芥子之介の手品の種ミなつた雀は世間で大評判である。手品の大入で芥子之介も雀も金を儲けて工面が良くなり、雀は慰に義太夫節を習ひ、幫間になり、吉原雀ウヂシノスケいふ唄を作つた。この唄は今日まで歌はれてゐる。

可愛い、子には旅をさせろの諺の通りで、雀は今本當の福羅雀になつて暮した。

斯うした特殊の小説に馴れない讀者は、これを馬鹿げた物に感じるかも知れない。天明、寛政の頃には、この様な小説が大人に最も喜ばれ、一種で一萬二三千部の出版數に達した作品があり、世界出版史上の驚異であつた。其の本質はナンセンスである。鳥ごへの毘沙門天、兩國の廣小路、洲崎なご江戸で有名な土地が現れて來、鳥のまぢ・芥子之介の手品、豚や蝙蝠の輕業、雀形・金鏝燒・雁金燒・鮎の雀燒なご當時人氣が高かつた物である。

話の筋でも知られる通り、明和五年十一月市村座興行「男山弓勢競」の第二番目に出した所作事「教草吉原雀」オシヤエシゼイクラネ言ふ拍子舞物を、「舌切雀」に取合せて脚色したものである。「教草吉原雀」は櫻田治助が書き、作曲は富士田吉治・杵屋作十郎、振附は二代西川扇藏であつて、江戸長唄で歌はれた。吉原雀ヨシハラは葦切の異名であるが、同時に廓を流す素見ムセケンぞめきの客の意味もなり、名作の長唄としては廓情調をもつてする大人の趣味である。従つてこの小説は大人に向つて「舌切雀」を脚色したものである。

さて七月號から述べて來た處を總括して「舌切雀」の展開を考へて見よう。

一 第一系統の説話は第二系統の説話よりも「腰折雀」に近く、これが「宇治拾遺物語」から展開して來た説話の、最初に完成した形らしい。即ち二家庭間の出來事で、老婆二人の場合が古く、悪い方は其の儘ままし、良い方が爺おやになつた話は新しい。悪い婆おばミ良い爺おやミを一緒にし、これを夫婦にした事は、童話の一般からは單純化の方法に據つたものである。第二系統の話が第一系統の話から分れて出たのは、大體に享保頃か或は少しくだつて元祿頃かと思はれる。

二 第一第二兩系統の話の終の方は、殺されるミ改心するミ二様に語られてゐる。この場合殺される方が古く、それを平和的道德的な改心に變化したものらしい。従つて第一系統の話には殺される結末が多く、第二系統の話には改心

の結末が多い。これが後には混亂して兩者共にそれ／＼に語られてゐる。

三 糊は多くは洗濯に關係のある糊である。但し後年の物になるミ、障子を張る糊もなつてゐる。

四 雀を捜しに行つた場所は松原が古く、この松原から雀の隠れ里へミ案内されて行つたらしい。後年には多くは竹藪が雀の隠れ里の様に見られてゐる。

五 迎へに出たのは舌を切られた雀ミするのが古いらしい。小雀の意味が子雀ミなり、轉じて親雀が迎へに出たミなつたものか。親子子ミの關係は童話の聞き手ミ話し手の關係であつて、この意味から親雀の出迎が有力ミなつたものかもしれない。

六 雀を捜す際の言葉は、「舌きれ雀・舌きれ雀チ ヽツ／＼／＼」なミが古く、「舌切雀のお宿は何方ぢや」、「舌きり雀お宿は何處だ／＼」・「舌きり雀お宿はさこだ。チウ／＼／＼」等は寶曆以後のものである。

七 切られた雀の舌が如何にして全治したかに就いては、記録は殆きない。但し、家藏の黒本「舌切すゞめ」に、「オ、おぢいさま、私の舌は藪井竹庵さまのお薬でなをりました」。

こあるのは誠に珍しい。

八 老人を款待する際の踊は、初は藁の笠を被つて踊る雀踊であらう。それには「雀躍^{ジャヤヤク}」の熟語もあり、「雀百まで踊忘れず」の諺もあり、従つて雀に付き物の踊が添はつたものであらう。後になるミ瀬川菊之丞の槍踊なミが世の大評判で、一時話の中にこれが挿入されたらしいが、それも一時で、雀踊は依然ミして離れぬ關係にある。但し踊の歌は記されず、後年の物には、

「君をまつかぜいぢや寒やチウ／＼」

なき記してあつてこれも亦珍しい。雀が加害者を響應した事は餘り記されてゐない。

九 後になる程正邪善惡が對立的に取扱はれ、惡婆は重い葛籠を強請する。重い方が軽い物より遙に内容的であると言

ふ考へ方は、一粒の瓢箪の種によつて得た幸福より、三粒の種によつて得る幸福の分量が大であらうとする「宇治拾遺物語」の考へ方の展開であらう。この葛籠の數に就いては單に二個だけになし、初めに一方の人物が軽い方を取り、後の人物が残りの重い方を取つたミする話ミ、いつも輕重の二個の葛籠があり、いづれの人物もそのいづれかを選択し得る様になつてゐる場合ミがある。前者の方が勿論古い。又、皮籠ミする話もある。

一〇 軽い葛籠から出て來る寶物に就いては、金銀や色々結構な物、寶珠や金銀、金銀珠玉卷絹、七種の寶ミ綾錦、其の色々に記されてゐる。古くは金銀が主であらうが、後には打出の小槌・隱蓑・隱笠・七寶・寶珠の玉等の所謂寶物が主になつてゐる。

一一 重い葛籠から出る物は古くは蟲類であつて、「腰折雀」から傳はつた處であるが、それが後には化物に變化する。化物の行動は復讐の變形である。即ち糊を嘗めて舌を切られたのであるから、復讐ミして何處かを嘗めてゐる。婆さんの頭を嘗めるミか、頭を銜^{クハ}へたり尻を嘗めたりするミか、又喰ひつくものなきもある。

「なめ殺すぞ」。

ミ化物が言つて大きな舌で婆さんを嘗めて居る圖もある。「竹の栖物語」の雀の雛の化物は、手に鋏を持ち、長い舌を火焰の如くに出し、婆さんの舌でも切る様な態度をしてゐる。これ等には童話發生の折の素朴な復讐心理ミ、兒童の心に適合する心憎さが認められる。

一二 外題に就いては七月號に述べた。

「舌切雀」の依據に就いては古來より多くの説が行はれてゐる。其の最初に見るべきは「桃太郎物語」(讀本、寶曆二年の序)にこれを「搜神記」に關係つけた記事である。曲亭馬琴は「燕石雜志」(馬琴の隨筆)中に同様に「搜神記」に觸れてゐ、これを「舌切雀」の根元と見てゐる。

楊寶が九歳の時に、華陰山へ行つて一羽の黃雀を見つけた。雀は鷓鴣鼻フクロウに襲はれて地上に落ち、蟻に一杯たかられて苦しんでゐた。楊寶は憐んで助けて歸り、箱に入れ、黃花を採つて百日ばかり飼養した。するに羽根も見事に生えた。或夜十二時頃に楊寶が書を読んでゐるに、黄色の衣を身につけ着た童子が來て、楊寶に御辭儀をし、

「私は王母の使でございます。貴君に助けられて誠に有難い事です。今から南海に使に行かうとしてゐます。歸つて來る事は中々むづかしいので、白い環タマキを四枚差上げます。貴君の御子孫は、身が潔白で三公の位に昇られませう」と言つた。果して其の通りであつた。

右の「搜神記」に據つたことをする馬琴の説は、漢籍尊重、支那尊重の彼の立場が根柢となつてゐる。直に従ひ得るものではない。又、朝鮮の没夫興夫ムツブツの話や、蒙古童話等とも類似があるが、それは單なる類似で、これ等の物を原據として作られたとは思はれない。寧ろ國民性が何時かはなしに語り纏めたものであらう。物羨みの失敗譚である「雀恩に報ゆる事」が核心となつて語り傳へられてゐるうちに、民族的の感情や意志や想像力、別して語り手の心理聞き手の心が各方面から作用し、何時しか斯うした形態を作つたものであらう。この意味に於ける原據としては「宇治拾遺物語」を擧げざるを得ない。「宇治拾遺物語」と「搜神記」の關係に至つては未だ何をも定める事が出来ない。

いづれにせよ、原據と思はれる話、最初に完成したことを考へられる話に、今日の「舌切雀」を比較する時は、あつばれの大わか竹ぞ見ぬうちに

の一句が強く心に響いて来る。(三六)

附言 國文學上の諸作品を読む際に、童話方面の史料に出會ふ時は、それを丹念に蒐集して置きました。それ等の史料が本論文の基礎となつてゐます。私は記録された童話を集め、確實な文獻によつて、一步一步過去に溯り、溯り得た其の時代から、説話の依據をも展開をも考察すべきものと思つて居ります。現在行はれてゐる話を其のまゝ、支那の文獻や、朝鮮・臺灣・滿洲・南洋諸島・印度なごの諸説話と比較し、少しの類似點があれば、直に其の影響であるなご、言ふ童話研究者が多いのには驚かされます。讀者諸賢には御所藏或は御存じの史料が、おありの事と思はれます。さうぞ淀橋區西落合町二の三八四小池宛に御示教を願ひます。

本論文は今年三男が誕生いたしましたので、親心から特に稿したものであります。